大門通り界隈一束

続旧聞日本橋・その一

長谷川時雨

あたしの古郷（ふるさと）のおとめといえば、江戸の面影と、香（か）を、いくらか残した時代の、どこか歯ぎれのよさをとどめた、雨上りの、杜若（かきつばた）のような下町少女（おとめ）で、初夏になると、なんとなく思出がなつかしい。

　土（つち）一升、金（かね）一升の日本橋あたりで生れたものは、さぞ自然に恵まれまいと思われもしようが、全くあたしたちは生花（きばな）の一片（ひとひら）も愛した。現今（いま）のように、ふんだんに花の店がない時分だから、一枝の花の愛（いと）しみかたも格別だった。紅梅が咲けば折って前髪に挿し、お正月の松飾りの、小さい松ぼっくりさえ、松の葉にさして根がけにした。山吹の真白なじくも押出して、いちょ

うがえしへかけた。五月の節句には菖蒲（しょうぶ）の葉を前髪に結んだり、矢羽根（やばね）に切ったのを簪（かんざし）にさしたものだった。

新藁（しんわら）は、いきな女（ひと）の投島田（なげしまだ）ばかりに売れるのではなく、素人（しろうと）でも洗い髪を束ねたりしてよく売れた。燕（つばめ）の飛ぶ小雨の日に、「新藁、しんわら」と、はだしの男が臑（すね）に細かい泥を跳（は）ねあげて、菅笠（すげがさ）か、手ぬぐいかぶりで、跣足で、青い早苗を一束にぎって、売り声を残していった。

水玉という草に水をうって、涼しくかけたものだが、みんな一時（いっとき）のもので、赤くひからびるまではかけてい

ない。直《じき》にかけかえる手数はいとわなかった。一たい、平日《ふだん》から油｜染《じ》んだ髪をきらっていたから、菅糸《すがいと》だって、葛引《くずひき》だって、金紗《きんしゃ》（元結《もっとい》ぐらいな長さの、金元結の柔らかい、縒《より》のよい細いようなのを、二、三十本揃えたもの。芝居の傾城《けいせい》の鬘《かつら》［＃「鬘」は底本では「鬟」］にかけてあるのと同じ）だって、プツンと断《き》って、一ぺんかけただけだった。

　深窓《しんそう》な育ちでも、どこか女｜伊達《だて》めいた気風をもって、おそろしく仁義礼智の教えを守って——姿の薄化粧のように、魂も洗おうとした。この二行ばかりの文章は、文飾のようにもとられようが、濃かれ薄かれ、そんな

気持ちはたしかにあったのだ。人と、その性質は別としても、その地方色としては――

　古い日記をくりかえして見ると、父が話してくれたことが書いてあるので、此処（ここ）へ抜いて見よう。

――父の晩酌のとき、甥（おい）の仁坊（まさぼう）のおまつりの半纏（はんてん）のことから、山王様（さんのうさま）のお祭りのはなしが出る。仁（まさし）の両親とも日本橋生れで、亡（な）くなった母親は山王様の氏子（うじこ）、此家（こちら）は神田の明神様の氏子、どっちにしても御祭礼（おまつり）には巾（はば）のきく氏子だというと、魚河岸から両国の際（きわ）までは山王様の氏子だったのが、御維新後に、日本橋の川

からこっちだけが、神田明神の氏子になったのだと、老父（ちち）が教えてくれた。

あたしたちは神田明神へお宮参りをしましたが、お父さんは山王様へお宮参りにいったのですかときくと、そうだといわれる。

それからそれへと古いはなしが出る。以下は老父（ちち）の昔語り——

玄冶店（げんやだな）にいた国芳（くによし）が、豊国（とよくに）と合作で、大黒と恵比寿（えびす）が角力（すもう）をとっているところを書いてくれたが、六歳（むっつ）か七歳（ななつ）だったので、何時（いつ）の間にかなくなってしまった。画会なぞに、広重（ひろしげ）も来たのを覚えている。二朱（にしゅ）もって

ゆくと酒と飯が出たものだった。

国芳の家(うち)は、間口が二間、奥行五間ぐらいのせまい家で、五間の奥行のうち、前の方がすこしばかり庭になっていた。外から見えるところへ、弟子が机にむかっていて、国芳は表面に坐っているのが癖だった。豊国の次ぐらいな人だったけれど、そんな暮しかただった。その時分四十位の中柄(ちゅうがら)の男で勢いの好い、職人はだで、平日(しじゅう)どてらを着ていた。おかみさんが、弟子のそばで裁縫(しごと)をしていたものだ。武者絵(むしゃえ)の元祖といってもいい人で、よく両国の万八(まんぱち)――亀清楼(かめせい)のあるところ――に画会があると、連れていってくれたもの

だ。

国芳の家の二、三軒さきに、鳥居清満（とりいきよみつ）が住んでいた。大坂町の雷（かみなり）師匠は、冬でも表を明っぱなし、こまよせから、わざと見えるようにしてある。上（あが）り口の板敷のところに、いけない児童（こ）を空俵に入れたり、火のついた線香をもたせたりして、自分の傍には弓の折をひきよせておいて、がみがみ大声で呶鳴（どな）りちらしている。空俵へ入れるのは、これから河へ流してしまうというのだ。他のおとなしい児童（こたち）がふるえながら詫するると、それをしおに俵から出してやる。見えすいた広告法だが、厳（やかま）しい師匠にやらなければ、いけないと思っ

ている、無学町人の親たちには、それが大層評判がよかった。

　国芳の家のそばにも手習師匠があった。私が七歳（ななつ）であったころに、四十位な年配（ねんぱい）で、小笠原の浪人加賀美暁之助（かがみぎょうのすけ）という人だった。この人のほうは立派な人物で、大橋流の書も佳（い）いし、絵は木挽町（こびき）の狩野（かのう）の高弟で、一僊（いっせん）といって、本丸炎上の時は、将軍の居間の画を描いたりしたほど出来たし、漢学も出来る、手をとって教えてもらった。撃剣もおしえた。色は黒かったが人品の好い人で、御家内（ごかない）も武家の出だから品のある女（ひと）だった。

三馬（さんば）に逢（あ）ったことがある。そうさ、五十四、五に見えた。猿のしるしのある家で、化粧水を売っていたっけ。倉の二階住で、じんきょやみのくせに妾（めかけ）があった。子供心にも、いやな爺（じじい）だと思ったよ。

歌川輝国（うたがわてるくに）は、宅（うち）のすぐ前にいたのさ。うまや新道――油町と小伝馬町の両方の裏通り、馬屋新道とは、小伝馬町の牢屋（ろうや）から、引廻しの出るときの御用を勤めるという、特別の役をもっている荷馬の宿があったから――の小伝馬町側に住んでいた。くさ双紙（ぞうし）の、合巻（ごうかん）かきでは、江戸で第一の人だったけれど、貧乏も貧乏で、

しまいは肺病で死んだ。やっぱり七歳（ななつ）ぐらいから絵をおしえてくれた。その時分三十五、六だったろう。豊国の弟子だったから、豊国の描いたものや、古い絵だの古本だの沢山あった。種彦（たねひこ）がよこした下絵の草稿もどっさりあった。私は二六時中（しじゅう）見ていても子供だからそんなに大切にしなかったし、おかみさんのおもよというのは、竈河岸（へっついがし）の竈屋の娘で、おしゃべりでしようのなかった女だから、輝国が死んでから、そういうものはどうなってしまったかわからなかった。

住居（すまい）は入口が格子で、すこしばかり土間があって、二間に台所だけ、家賃は（今の金で）三十銭位だとお

ぼえている。それでもお酒は大好きで、たべものは**てんや**ものばかりとっていた。貧乏でもそういうところは驕（おご）っていた。芝の泉市（せんいち）だの、若狭屋（わかさや）だのという絵双紙屋から頼みにきても、容易なこっては描いてやらなかった。その時分、定さんという人がよく傭（やと）われてきたものだ。輝国が絵——人物や背景を描くと、その人は、軒だとか窓だとか、縁側だとか、襖（ふすま）とかいったものの、模様や線をひきにくる。腕はその当時いい男だといわれていたのに、弁当も自分持ちで、定木（じょうぎ）も筆も持参で来て、ひどい机だけかりて仕事をして、それで一日がたった天保銭一枚（当時の百文・明治廿年代ま

で八厘）。今の人がきくと嘘のようだろう。
寿鶴亭という八人芸（時雨云、拙著『旧聞日本橋』の中には、この寿鶴の名が思いだせないで〇〇斎と書いたのと同じ人）の上手なのがすぐ近所にいた。娘に、油町の辻新という大店の権助を養子にして舂米屋をさせ、自分たちは二階住居をしていた。賑やかな人で、自分の家の二階で八人芸をやっていると、まったく瞞されるほど、大勢寄っているようにきこえた。かみさんは新宿あたりの上りもの（遊女の）で、強者だった。孫娘のおつるというのを手塩にかけて育てていたが、それが後に妾にいって大層出世をしたとかきいた。

たしか、大鳥圭介（おおとりけいすけ）さんのところへだときいた。

辻新といえば、あすこの家（うち）の頭（かしら）――出入りの鳶職（とびしょく）――が、芝金（しばきん）の直弟子（じきでし）で、哥沢（うたざわ）の名とりだった。めっかちの、その男のつくったのが「水の音」という唄だ。自分の名の音がよみこんである――

今日はこの位にしておこうといって、父上は枕（まくら）につかれる。こういう事は、いつもきき流しにしてしまって、あとで記録しておけばよかったと、いつも後悔するから、今夜こそ書いておこう。

と止めてある。父は天保十三年の生れ、七歳（ななつ）の時といえば嘉永元年だ。外国船がしきりに渡来して、世の中

は刻々にむずかしくなっていたころだと思う。

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店
　　1983（昭和58）年8月16日第1刷発行
　　　2000（平成12）年8月17日第6刷発行
底本の親本：「桃」中央公論社
　　1939（昭和14）年刊行
入力：門田裕志
校正：松永正敏
2003年7月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。